特集

S-イノベ、「10年」の軌跡

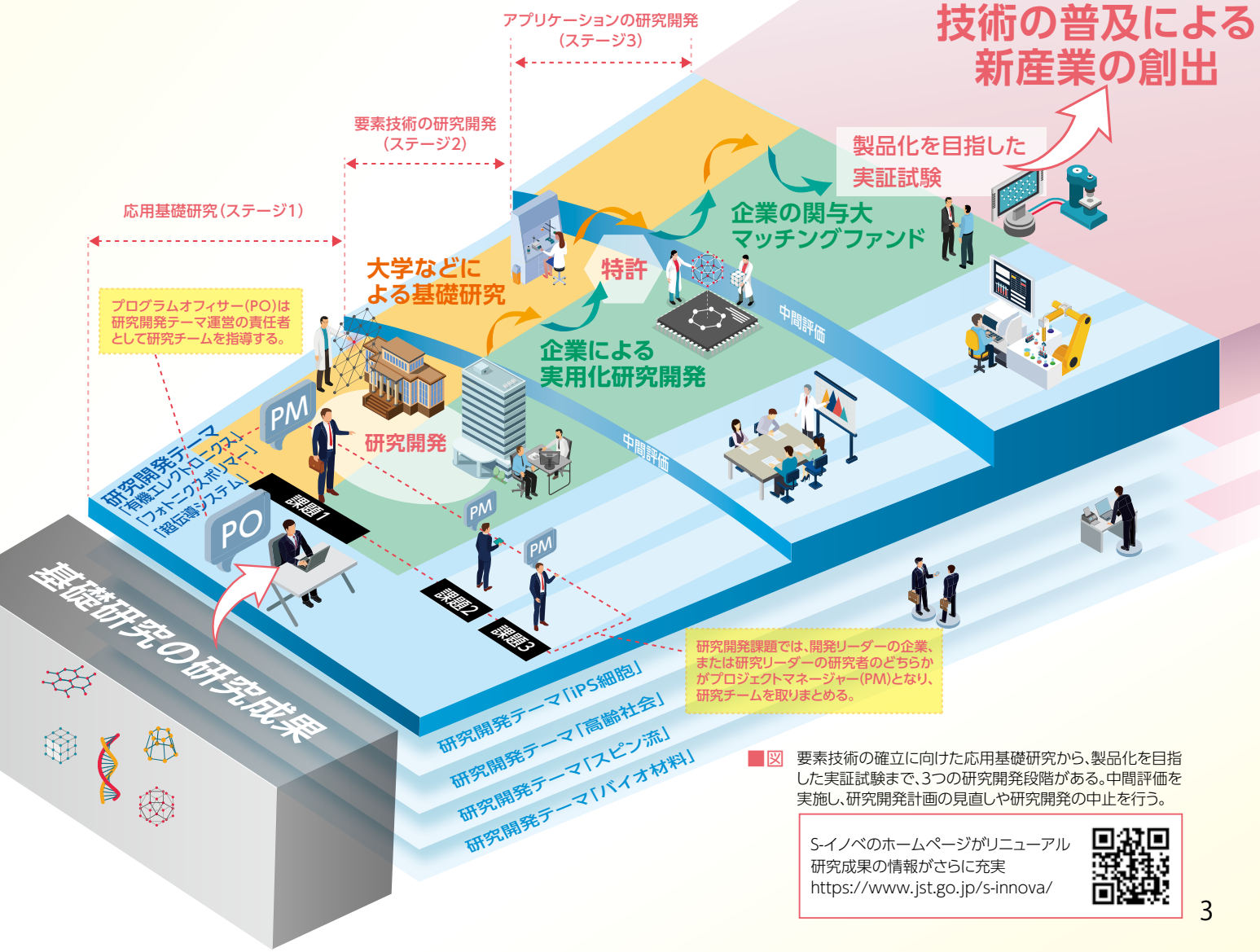
人工多能性幹細胞（iPS細胞）の樹立や塗布型有機太陽電池の開発など、社会や産業を大きく変革し得る成果をJSTの戦略的創造研究推進事業は生み出してきた。優れた成果を基礎研究だけに留めず、応用開発までを1つの事業で長期一貫して支援し、新しい産業創出の礎となる技術として確立しようという構想の下、「戦略的イノベーション創出推進プログラム（S-イノベ、当時：戦略的イノベーション創出推進事業）」は2009年に誕生した。

それまでの産学連携事業は研究開発テーマを設けずに提案を募ることが一般的だったが、S-イノベではJSTの基礎研究から網羅的にテーマを集め、ワークショップなどを通じて、最終的に日本の産業にイノベーションをもたらし得るもののみに絞り込んだ。各研究開発テーマにはその技術分野に精通したプログラムオフィサー（PO）を配置し、産と学で構成された複数の研究開発チームを採択する仕組みとした。

最大の特徴は最長10年にも及ぶ研究開発期間だ。当時、JSTには10年間の研究開発を掲げる制度は他に例がなかった。3つのステージに分けて、ステージ1（2～3年度）は要素技術の確立に向けた基礎・基盤的研究開発に充て、次のステージ2（3～4年度）で要素技術の研究開発を発展させる。研究開発費は1チーム当たり年間最大7000万円で、ステージ2まではJSTが全額委託し、最後のステージ3（2～3年度）は企業とのマッチングファンドで実証試験や製品化を目指す。

研究開発の効果を最大限に引き出そうと、当時の産学連携事業としては画期的な試みをJSTが独自に考案し、プログラムを作り上げてきた。S-イノベは2020年度で全ての研究開発の終了が予定されているが、COI（センター・オブ・イノベーション）プログラムや未来社会創造事業などの長期にわたる研究開発プログラムの先駆けとなり、その仕組みはA-STEP（研究成果最適展開支援プログラム）の一部にも継承されている。

7つの研究開発テーマのうち、最初に発足した「有機エレクトロニクス」「フォトニクスポリマー」「超伝導システム」が18年度末に研究開発を終えた。4月号特集は、3つの研究開発テーマを推進したプログラムオフィサーと研究者が、それぞれの10年を振り返る。



■図　要素技術の確立に向けた応用基礎研究から、製品化を目指した実証試験まで、3つの研究開発段階がある。中間評価を実施し、研究開発計画の見直しや研究開発の中止を行う。

S-イノベのホームページがリニューアル
研究成果の情報がさらに充実
https://www.jst.go.jp/s-innova/